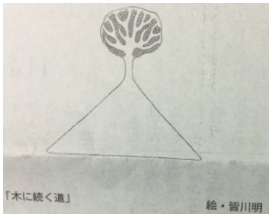
沖縄　99 %が押しつけるもの

表題は朝日新聞 9 月 25 日朝刊「日曜に想う」。福島申二・編集委員が「沖縄の怒り」をシビアに語る。

人間だれも、口にする言葉のふとした端から透けて見えるものがある。8 月から沖縄・北方担当相をつとめている鶴保庸介氏が就任会見でこう述べた。

基地問題で政府と対峙する沖縄への振興予算減額をにおわせつつ、「消化できないものを無理やりお口開けて食べてくださいよでは、全国民の血税で使われているお金を無駄遣いしているという批判に耐えられない」。全体の文脈はともかく、この「無理やりお口開けて―」のくだりを聞き捨てならぬ沖縄への侮辱と感じた人は少なからずいたようだ。

取材で訪ねた沖縄で、旧知の琉球大学の元教授は憤慨していた。「同じような言い方を、たとえば本土の被災地に対してするでしょうか。相手が沖縄だからですよ。見くびっている」と。



言葉尻をあげつらう愚だろうか。そうではあるまい。言葉の端に今の政権のおごりが透けているように思われてならない。若手までが染まっていないか。はたして鶴保氏は今月 16 日、辺野古への新基地建設をめぐる訴訟の高裁判決前にもこう述べた。「注文はたったひとつ、早く片付けてほしいということに尽きる」

それを言う前に、強引に基地建設を急ぐことこそが、食べたくないものを無理やり口を開けて食べさせる民意無視の強行だと、思い至るべきだろう。

―　―　―　―　―　―

拒む口をこじ開けるような工事が、本島の北部、東村の高江周辺では始まっている。那覇から車で 2 時間余り。緑濃い「やんばるの森」で、オスプレイなどが発着する複数のヘリパッドの建設が、反対行動を抑えて進められていた。

私が訪ねたのは自衛隊ヘリによる重機空輸が始まった翌日だった。反対する県民や支援者ら約 250 人が、全国から動員された機動隊とにらみ合っていた。緊迫の森に、初秋に鳴くオオシマゼミの澄んだ声がしきりに降り注いでいた。

米軍施設建設の下請けのような自衛隊の出動は、きわめて異例という。翁長雄志知事は、「他の都道府県でこういうことが起こりうるのか、こういうことが起こるたびに思う」と感情を押し殺すように語った。これには背景がある。

7 月 10 日、参院選があった。沖縄では政府の基地政策を批判する候補が、自民現職の沖縄・北方相(当時)を大差で破った。しかし夜に勝負がつくと、あろうことか翌朝 6

時、政府は突如、反対で長く中断していたヘリパッドの現場に資機材の搬入を始めた。沖縄の示した民意が意趣返しのように踏みにじられたと、多くの人が憤ったのは当たり前だ。

他にもあれこれ、本土でなら起こりえないことが多すぎる―それは知事だけではなく、沖縄の多くの人のやりきれぬ胸の内だろう。「沖縄差別」の声が噴き出すゆえんだ。本土という 99%が 1%に負担と屈辱を押しつけ、幸せは私、苦しみはそちら、と言い放つのなら、そこには民主主義をうたう政治はない。

―　―　―　―　―　―

「まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている」という印象深い書き出しで、司馬遼太郎の「坂の上の雲」は語られていく。明治初期、その小さな国日本の開化にのみ込まれていったのが琉球王国だった。いわゆる琉球処分で沖縄県になって今年で 137 年になる。

徹底した皇民化政策が進められ、そのはての沖縄戦で島は壊滅する。あげくに長く占領され、土地を奪われて基地だらけになった戦後の故郷を、沖縄出身の詩人山之内獏はこう嘆き悲しんだ。

〈まもなく戦禍の惨劇から立ち上り/傷だらけの肉体を引きずって/
どうやら沖縄が生きのびたところは/不沈母艦沖縄だ〉。

基地の島を空母にたとえ、人々は甲板の片隅に追いつめられて米を作る手だてもないと、詩は続いていく。

辺野古の問題は、移設とはいうが、つまりは新しい基地の建設である。人々の抵抗は、不沈空母であり続けることへの抵抗といえる。7 月の参院選の結果、沖縄の選挙区から選ばれた自民党の衆参国会議員が 1 人もいなくなったのは、そうした民意の強い表れにほかなるまい。

1%に押しつけて 99%が安らぐ異様な図を、私たちは描き直すときである。

（2016 年 10 月 3 日）